

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

パン種

――マルコ伝第8章1～21節――

1964年12月13日

小池辰雄

どうにもならん 限界的現実の突破 宇宙の創造の霊 相対的次元の突破 この福音で突破
悪いパン種 御霊のパン種 エン・クリスト 自我がぶっ飛んだ 二千年のかなたから

【マルコ8:1～21】

1 その頃また大なる群衆にて食うべきものなかりしかば、イエス弟子たちを召して言い給う、² 『われ此の群衆を憫む、既に三日われと偕におりて食うべき物なし。』³ 飢えしままにて、其の家に帰らしめば、途にて疲れ果てん。其の中には遠くより来れる者あり』⁴ 弟子たち答えて言う『この寂しき地にては、何処よりパンを得て、この人々を飽かしむべき』⁵ イエス問い給う『パン幾個あるか』⁶ 答えて『七つ』という。⁷ イエス群衆に命じて地に坐せしめ、七つのパンを取り、謝して之を裂き、弟子たちに与えて群衆の前におかしむ。弟子たちすなわちその前におく。⁸ また小さき魚すこしばかりあり、祝して之をも、その前におけと言ひ給う。⁹ 人々、食いて飽き、擘きたる余りを拾いしに、七つの籃に満ちたり。¹⁰ その人おおよそ四千人なりき。イエス彼らを帰し、直ちに弟子たちと共に舟に乗りて、ダルマヌタの地方に往き給えり。¹¹ パリサイ人いで来りて、イエスと論じはじめ、之を試みて天よりの徴をもとむ。¹² イエス心に深く嘆じて言ひ給う『なにゆえ今の代は徴を求むるか、誠に汝らに告ぐ、徴は今の代に断えて与えられじ』¹³ 斯て彼らを離れ、また舟に乗りて彼方に往き給う。

¹⁴ 弟子たちパンを携うることを忘れ、舟には唯一つの他パンなかりき。¹⁵ イエス彼らを戒めて言ひたもう『慎みてパリサイ人のパンだねと、ヘロデのパンだねとに心せよ』¹⁶ 弟子たち互いに、これはパン無き故ならんと語り合ふ。¹⁷ イエス知りて言ひたもう『何ぞパン無き故ならんと語り合ふか、未だ知らぬか、悟らぬか、汝らの心なお鈍きか。』¹⁸ 目ありて見ぬか、耳ありて聴かぬか。又なんじら思い出でぬか、¹⁹ 五つのパンを擘きて、五千人に与えし時、その余りを幾籃ひろいしか』²⁰ 弟子たち言う『十二』²¹ 『七つのパンを擘きて四千人に与えし時、その余りを幾籃ひろいしか』²² 弟子たち言う『七つ』²³ イエス



言いたもう『未だ悟らぬか』

●どうにもならん

五千人の者にパンを食べさしめた、「豊かなる食物」と題してマルコ伝6章でお話をいたしましたところと似たところですよ。

1 その頃また大なる群衆にて食うべきものなかりしかば、イエス弟子たちを召して言い給う、²『われ此の群衆を憫む、既に三日われと偕におりて食うべき物なし。』

キリストに群衆がどのように寄り集まって、御言を聞いていたとみえます。食べ物が無い。三日一緒にいるけれども、もう食べ物が無くなってしまった。非常にかいわいそうに思う。というんですから、よほど空腹の限界にきているわけです。

其の中には遠くより来れる者あり³』

実にその現実を想像すると、えらいことです。

4 弟子たち答えて言う『この寂しき地にては、何処よりパンを得て、この人々を飽かしむべき』

どうしようも、パンの得ようがありませんと。

5 イエス問い給う『パン幾個あるか』答えて『七つ』という。6 イエス群衆に命じて地に坐せしめ、七つのパンを取り、謝して之を裂き、弟子たちに与えて群衆の前におかしむ。弟子たちすなわちその前におく。7 また小さき魚すこしばかりあり、祝して之をも、その前におけと言ひ給う。8 人々、食いて飽き、擘きたる余りを拾ひしに、七つの籃に満ちたり。9 その人およそ四千人なりき。イエス彼らを帰し、

驚くべき群衆ですね。四千人というのは大変なもんです。

10 直ちに弟子たちと共に舟に乗りて、ダルマヌタの地方に往き給えり。

「ダルマヌタ」というのはよく分らないらしい。ガリラヤの少し東の方ではないかというようなことです。とにかく、驚くべき現実をあつさり書いてある。聖書というものは――聖書だから、みんないい気になつて読んでいるけれども――とても読めない。あまりに凄い現実だから。どうにもならんです。

●限界的現実の突破

11 パリサイ人いで来りて、イエスと論じはじめ、之を試みて天よりの徴をもとむ。12 イエス心に深く嘆じて言い給う『なにゆえ今の代は徴を求むるか、誠に汝らに告ぐ、徴は今の代に断えて与えられじ』13 斯て彼らを離れ、また



舟に乗りて彼方に往き給う。

¹⁴弟子たち。パンを携うることを忘れ、舟には唯一つの他パンなかりき。¹⁵イエス彼らを戒めて言いたもう『慎みてパリサイ人のパンだねと、ヘロデのパンだねとに心せよ』¹⁶弟子たち互いに、これはパン無き故ならんと語り合う。¹⁷イエス知りて言いたもう『何ぞパン無き故ならんと語り合うか、未だ知らぬか、悟らぬか、汝らの心なお鈍きか。¹⁸目ありて見ぬか、耳ありて聴かぬか。又なんじら思い出でぬか、

この畳みかけたキリストのこの言葉、これはよく肝に銘じないといかん。

¹⁹五つのパンを擘きて、五千人に与えし時、その余りを幾籃ひろいしか』弟子たち言う『十二』²⁰『七つのパンを擘きて四千人に与えし時、その余りを幾籃ひろいしか』弟子たち言う『七つ』²¹イエス言いたもう『未だ悟らぬか』
こういう問答です。

「カナの婚宴」(ヨハネ2:1～11)のところでも、葡萄酒が婚宴の宴席の途中で尽きてしまった。葡萄酒が婚宴の宴席で尽きたなんていうのはとんでもない話です。これが行き詰まりです。その行き詰まりをキリストは

「水を六つの瓶に満たせ」

と言われた。四五斗入りの六つの瓶に水を満たした。

「饗宴長に持つてゆけ」

と。持つていつて、それを舐めたところが既に葡萄酒であった。

この現実においては、みんな空腹でもう限界にきている。この限界的現実、というものの、しばしば私たちもぶつかるわけです。病において、あるいは事業の失敗とか、学生だった試験の難関とか、いろいろな限界にきます。その限界的現実にぶつかって、ただ人の助けを人間的な知恵で求めてみたり、あるいは諦めてみたり、やけくそになってみたり。いろいろな手段や方法を講じたり、おかしいことになったり、というわけです。

限界的な現実、あるいは次元的な現実、そういう中に私たちの相対的な生活はいつも脅かされたりする。ところが、キリストは、この限界をもの凄く突破なさる。

戦争でもそうですよ。いよいよ窮地に陥って、敵の或る弱点を見て、そこに向かって全軍が――それが何人であろうと――打って一丸となって突撃を敢行する。これが突破の戦術です。私たちの人生の戦いにおきましても――キリストは敵を倒すための突破ではなかった――もの凄い恵みを与えるための突破です。そういう限界的現実、次元的な現実を、キリストは死の突破を――こういった儂きこの世の生に対して永遠の生をもたらすところの突破を――キリストは身をもつて開いてくださった。

この前、

「開け！ エパタ！」



ということを学びましたが、本当に突破口をもつて打ち開いてくださるその中で――今度は、中の現実です――私たちがこの8章の「パン種」を受けとりたいと思うわけです。

●宇宙の創造の霊

七つのパンしかない。相手は四千人である。四千人でも五千人でも一万人でも、キリストは一向差し支えない。キリストは無尽蔵の生命を持っておられるから。お釈迦さんの世界でも「無量寿」という。無量。量り知ることができない。無そのものが無量を表していると申し上げているとおりです。無という字が即ち、無数無量を表している。私たちは永遠の生命です。仏教的に言えば「無量寿」ということです。

「十方衆生を自分は救う」

という。これが弥陀如来の本願であつて、『無量寿経』に四十八の本願があるそうです。その

の「三誓偈（重誓偈）」の中に、

我於無量劫 不為大施主

普濟諸貧苦 誓不成正覺

（われ無量劫において、大施主となりて、

あまねくもろもの貧苦を済わすば、誓いて正覺を成らじ。）

という。本当の正覺の世界は即ち、そのような恵み豊かな現実を展開することである。お釈迦さんもそうでしたが、いわんや、主イエス・キリストにおいては、それがもつと凄

いわけです。

水がなぜ、葡萄酒になるだろうか。どんな科学がこれを説明できるか。同じ太陽の光を受けながら、柿は柿のような甘さになり、リンゴはリンゴのような甘さになり、栗は栗のような甘さをもつ。どうして、あのような違いがどこから出てくるのか。万象これ不思議ならざるは無しです。現象そのものを、ある程度は科学が説明しても、なぜそうであるか。もうそうなると分らない。生命の創造の神秘の世界です。太陽の光ですら、そのようなことをする。いわんや、この宇宙の創造の霊が水を葡萄酒にしようが、蜂蜜にしようが、御意のままです。そういう驚くべき生命がキリストの中にある。キリストの中に驚くべき生命の酵素がある。キリストがもつていらつしやるこの霊子は――原子ではない、霊子、キリストの霊的素粒子は――驚くべきものである。

「我を食らえ、我を飲め、我につらなれ」

と、おつしやつている意味がそこにあるわけです。七つのパンを元にして、この酵素が働けば、これが驚くべき数に展開してしまう。物理の法則の世界でも、何か凄いことがあるでしょ。いわんや、それが霊的、法則の世界にいくと、もつと凄いわけです。これは奇蹟でも何でも無い。驚くべき霊的な法則と力がはたらいているということに、私たちは驚嘆するとともに、その現実の中に入っていく。この生命の中に入ったらば、聖書を読んでいる



うちに力が出なくては。ムサムサした気分なんかはどこかへ吹っ飛んでいかなければ。

また、己を義とするようなことではなくて――ヨブはどんなに義ただしくあつてもついに神さまの前に平伏しました――神の義であるということです。パウロも、自分は確かに人間的には義しい男であつた。熱心であつた。けれども、キリストの前に彼は本当に打ち砕かれ、平伏し、わが義を塵芥ちりあくたのごとくして、このイエス・キリストの義と、このイエス・キリストの生命と、このイエス・キリストの愛とその結晶体にされたのです。

●相対的次元の突破

イエス・キリストの、わずかばかりの素材を、限りなくその限界を突破させてしまうところの無限界の世界、無量寿の世界を彼自身が持つていらつしやる。私たちはこのキリストの次元にはとても行けないでしょう。けれども、この次元の質は、どんなに私たちの相対的現実がダメであつても、この質を本当にキリストを受けとることによつて、ただけないことはないんです。キリストの如く四千人に食わせるようなことはできませんが、それでも、それと質の同じことはできる。キリストがさせてくださる。皆さんは、人に与える水一杯の中にそれだけのものをこもらせることができる。その中に惜しみなく、キリストの愛を、我を通して現じたもうところのキリストの愛を注ぎ込むときに、それがどのような祝福を相手にもたらすことか。

私たちは、四千人にキリストが与えられた、この相対的現実の次元の突破をしなかったならば、信仰的現実において次元の突破をしなかったならば、いつまでたつても、それはダメなんです。それは事実、皆さんがこれからいよいよやっていただきたい。もう私たちに残っていることは、実行のみです。

「実行のみ」

と言つたつて、信仰と実行とを分けるのではないということは、いつも申し上げておりです。いよいよ信が本ものとなつていく。

「そうか、それではもう信仰はやめて、これから実行していこう」

なんて、それでは律法の義にまたなつてしまふ。そういうことではない。律法の義を言っているのではない。

キリストが、

「未だ知らぬか、悟らぬか、汝らの心なお鈍きか。目ありて見ぬか、耳ありて

聴かぬか。」

とおつしやつた。全キリスト教界に向かつて、

「この福音をまだお前たちは本当に受けとらぬか」

という聖霊の呻きが、キリストの呻きが天から、今のキリスト教の世界に現に今も響いているような気がいたします。それでは申し訳ない。



皆さん、聖書を読んでいるでしょうね。聖書を読むということは、或る章を読んだときに、それを繰り返して読むですよ。

私は学校でも学生に言うんです。

「君たち、ドイツ語を読んで、その意味が分かると、すぐそれを捨ててしまうからダメだ。読んで意味が分かったら、繰り返し繰り返し読んで、日本語になんか訳さないで、君たちが日本語を読むと同じようにドイツ語を読みながら、スーッとそれがきちやう。そこまで読まなかったら上達しない。それをやるかやらないかであつて、頭がいいのわるいのではない。それを本当にやるかやらないかだけの話だ。そうしたら、必ず楽しくなってくる。楽しくなってきたら本ものだ。ものはすべて楽しくならなかったら、本ものでない。努力しているうちはダメだ。始めは努力の面もあるだろう。けれども、そのうちに楽しくなる。努力の限界を突破して、楽しみという限界に入ってくる。楽園の限界に入ってくる。そうしたら、読まないではいられなくなってくる。それをやるかやらないかで、一年間でうんと大きな開きができてしまう。それだけの話だ。語学の勉強なんて勉強ではない。親しむことだ」

私たちは、語学に限らない。聖書も同じことです。本当に一章を繰り返し読んで――繰り返し読むと言つたつて、ただ暗記するということではない――読んでいるうちにその中で、その現場において最も響くものがある。それを本当に消化してものにする。本当にその現実を自分のものにする。この聖書の世界は直ちに生命の世界ですから。力の世界に入りますから。その読みかたを「身読^{しんどく}」という。そういうクリスチャンにならなかつたらつまらんです。

●この福音で突破

「悟らぬか、見ぬか、聞かぬか」

と、キリストが畳みかけておっしゃるとは、私たちは本当に申し訳ないクリスチャンです。私なんか60歳になつて、やっとこの辺に來たようなやつです。あなた方はまだ若いんだから、どしどし進んでいただかなくては。創価学会が何万人いようが、その前に一人で立つてびくともしないようなクリスチャンにならなくてはダメですよ。彼らはなにか大衆の力でもつて動いているところがあるようだ。けれども、どうも、かなり祈りがしつかりしているらしい。一生懸命やつているらしい。それがやはり彼らの力の秘訣とするならば、それにクリスチャンが負けたらどうするか。

私は来年から――「来年」なんて言いたくない、このクリスマスからと言つた方がいいかもしれない――本当にその気合でもつて行く人だけと行きます。信仰はどうでもいい方



はもうこの集会からさよならしていただく。そう思っています。ということは、

「私はまだダメだから来れない」

なんて、そんなことではない。

「私は苦しい、なかなか分かりません」

という方はどうぞ来てください。本当に入れる世界にいくらでもいれてあげますから。

「そんな精鋭の集会では、とても自分は及びつかないから、どうも行けない」

なんて、そうではない。私たちは、ダメだからこそいよいよキリストに入っていくというだけの話なんです。人間的な妙な判断はなさらないようにしていただきたい。

こないだ、府中病院に行きましてね、とにかく幾人かだけれども、かなり心が動きだしてきた。

「私は一か月に一回しか来れないが、あなた方が本当に私を求めているなら来るけれども、そうでなければ、もう私は来ない。来年からサヨナラする」

と言いました。しかし、本当に求めている気持ちがだいぶ動いてきましたから、

「今度のクリスマスに来なさい」

と勧めた。けれども、肺活量の非常に少ない人が

「階段を歩いて行けそうもない」

と言う。

「それでは車で来なさい。車賃をだすから来なさい。本当にこの福音で突破する、それだけの熱意をもつて来るならば、何としても来させてあげるよ。クリスマス

の祈禱会が大事だから、それでひとつのはつきりとした前進をしようではないか」

というようなわけです。
どうか、皆さん、もっと生き生きとしたはち切れるようなものをもって、お互いに心から愛の交わりが展開また展開していくようなことにならなくては。本当にこの世界に入

て、一人一人がこのキリストを、
「ああ、主さま！ この福音書の主さま」

と言って、これがもう慕わしくてしょうがない。これがうれしくてしょうがなくなってきたら、^{おの}自ずからみんな光を發します。自ずから熱を發します。自ずから進んで行きます。もちろん、人間のひとつの集会ですから、いろんな二義的、三義的なこともお互いに考え合うことは結構ですが、第一義のことを忘れて、二義、三義なことをいくらやったって、それはダメです。どうか、そういう気持でひとつ、喜ばしく勇ましく、いつも己を乗り越えながら進んでいただきたい。

●悪いパン種

パン種のことですが、マタイ伝13章33節のところに、



「³³また他の譬を語りたもう『天国はパンだねのごとし、女これを取りて、三斗の粉の中に入れば、悉く賑れいだすなり』」（マタイ13・33）

とある。天国はパン種の如くであると言う。

また、マタイ伝16章のところに悪いパン種のことがたくさん書いてある。パリサイ人とサドカイ人が、普段けんかしている仲間が今度はグルになって、キリストにかかってきたわけです。

「パリサイ人とサドカイ人と来りてイエスを試み、天よりの徴を示さんことを請う。……」

⁴邪曲にして不義なる代は徴を求む、然れどヨナの徴の外に徴は与えられじ』
斯て彼らを離れて去り給いぬ。

⁵弟子たち彼方の岸に到りしに、パンを携うることを忘れたり。⁶イエス言いたもう『慎みてパリサイ人とサドカイ人とのパン種に心せよ』⁷弟子たち互いに『我らはパンを携えざりき』と語り合う。⁸イエス之を知りて言い給う『ああ信仰うすぎ者よ、何ぞパン無きことを語り合うか。⁹未だ悟らぬか、五つのパンを五千人に分ちて、その余りを幾籃ひろい、¹⁰また七つのパンを四千人に分ちて、その余りを幾籃ひろいしかを覚えぬか。¹¹我が言いはパンの事にあらぬを何ぞ悟らざる。唯パリサイ人とサドカイ人とのパンだねに心せよ』¹²ここに弟子たちイエスの心せよと言い給いしは、パンの種にはあらで、パリサイ人とサドカイ人との教えなることを悟れり。』（マタイ16・1～12）

マルコ伝の方では、

「ヘロデのパン種に心せよ」

とある。ここでは

「パリサイ人とサドカイのパン種」

です。

「パリサイ人とサドカイ人との教えのことをおっしゃっている」

とここに書いてある。パリサイ人は、

「自分たちはエリートである。モーセの律法に詳しい。律法から派生しているいろんな掟、戒めに詳しい。そしてそれを実践している」

と誇って、自分たちは選ばれた者だと思っているのが「パリサイ」です。「パリサイ」とは「選び別たれたるもの」という意味です。「サドカイ」というのは、モーセの五書だけを金科玉条にしている祭司の族で、少し上流階級であって、政治的な面でローマの方に協調的である。霊的な事態、復活や天使というようなことは信じない。そういう普段仲の悪い連中が一緒になって、キリストにかかってくるわけです。そういった彼らの間違った現世主義や、間



違った律法主義の教えに気をつけろということです。また、「ヘロデ」は、ヘロデ大王の政治的な悪事——ことに幼児のキリストを殺そうと思って、あの当時、ベツレヘムの乳飲み子たちをみんな殺した悪いやつです——そういったすべて、キリストの福音に反するところのものはみんな「悪しきパン種」ですから。そいつが脹らんでいく。パウロも

「この世の小学にならうな」

と言っているとおりです。また

「異なる福音」

とパウロがガラテヤ書でも言っているような、そういったものに心せよと。主イエス・キリストだけが本当の義しき、そして本当の神の生命をもったところのパン種である。

●御霊のパン種

パウロがコリント前書5章で、

「6 汝らの誇は善からず、少しのパン種の、粉の団塊をみな膨れしむるを知らぬか。7 なんじら新しき団塊とならんために旧きパン種を取り除け、汝らはパン種なき者なればなり。それわれらの過越の羔羊、即ちキリスト既に屠られ給えり、8 されば我らは旧きパン種を用いず、また悪と邪曲とのパン種を用いず、真実と真との種なしパンを用いて祭を行うべし。」(コリント前5:6-8)

と言っている。過越の祭において種なしパンを食べて腰引きから出ていくということが、出エジプト記12章に書いてある。

即ち、キリストの十字架によって、贖罪によって、私たちはすっかり旧きパン種から除かれたものです。パン種無きものだけでも、今度は、

「天国はパン種のごとし」

とキリストが言われるこのパン種は、イエス・キリストという御霊のパン種です。御霊が私たちのパン種です。この御霊のパン種をいただければ、四千人にパンを食べさせるような具合に、

「我は真のパンである」

とヨハネ伝7章に書いてあるとおり、このパンを食べる者は飢えない。そのキリストというパンの元は、パンの酵素は、即ちパン種はこの聖霊です。この聖霊というパン種を私たちが本当に宿すときに、このような限界突破、次元突破ができる。

行き詰まったときこそ、実はもうひとつ素晴らしい世界に自分はいれられるところの、神さまの契機である、カイロスである、時である、こう受けとって進んでいくことです。絶対に人生は暗くとはいいかん。悲観してはいかん。人生は、キリストを受けとっている積極的な人が本当に勝っていく。また人を本当に救っていく。人を救うところの力ですよ。



証者とは何かというと、人を救いに、ただ指し示すばかりではない。ヨハネのごとくただ指し示しているのではない。洗礼のヨハネは指し示す人だったけれども、イエス・キリストを受けとった者は、使徒たちは、キリスト者というものは、手をもつてそれを引っ張りあげていく人、担いあげていく人です。我々、皆さん一人一人がそうです。学問があるのではないのと、そんなことは問題じゃない。何かそういった条件があるなら、それは福音ではない。どうか、ケチな考えはよしてください。

●エン・クリスト

聖書一巻がそのようにして、パン種でもって脹^{ふく}らがし、またキリストの光で浸透する。自分の中に光がある。みな「中」の世界です。自分の中にキリストのパン種を持ち、わがうちに不滅の灯火^{ともしび}があり、わがうちに涸れざるところの泉が湧いている。

仏教に「自力の、他力の」とあるけれども、いわゆる易行道も難行道もあるけれども、結局はどの道をとろうが、みな内側に来ているから、内側に来ているということにおいては一つだから、本ものです。もし、そうでなかったら、どんなにそれがどっちの道をとろうが、それは決して本ものにならない。「本もの」とは、

「自分のうちに本当の生命を持っている」

ということだけです。

「本当の光を持っている」

ことだけ。

「汝らは世の光なり、地の塩なり」

というのは、

「私がお前の中に入って塩となる。お前の中に入って光となる」

ということ。この他にどこにその福音があるか。これが本ものであって、その他はどんなに立派そうに見えても、それはうそものです。

我々は御霊に迫られて、滑つても転んでも、それが実にすべて実践となつて進んでいきます。ただ思案していることではない。中^{うち}なる世界、絶対に中です。

「極楽は東にあらず西になし、来た道さがせみんな身にあり」

という。仏教であろうと、キリスト教であろうと、その角度は最後のところはみな中の世界です。「わが中に」という。だから、パウロが、

「われキリストの中に、キリストわが中に」

と言っているではないですか。

「エン・クリスト」(キリストの中に)

「エン・エモイ」(わが中に)

というわけです。



●自我がぶっ飛んだ

キリストの十字架でぶっ飛ばされて、一番中心の自我がぶっ飛んだのだから、その自我のところに、御霊が、この酵素が、パン種が入ってきた。パン種と言おうが、水源と言おうが、光源と言おうが、何と言おうがいい。この本当の水源地、本当の光源地、本当のパン種が入ってきた。そうだったら、もう楽ではない。そして、それが本当の力なんだ。安息日はただ守るために守るのではない。安息日においてキリストの中に安息すれば、力が入るからです。キリストの中に安らえば、力が入る。

この集会に來ない方々が、私が本ものを与えてないために來ないならば、私は今日にでも集会をやめる。そうでなくて、私がとにかく本ものの世界から告白し、またそれを悲願としている限り、この気合にのつてくださらなかったら、つまらんです。だから、そういう方々とはサヨナラするよりか仕方がないというだけの話です。

どうか、私たちがこの集会に――もちろん、いろんな場合において來れません。分かっています。けれども、本当に悲願をもつて、誠意をもつて、この集会というものに――集会のためではない――私たちが本当にキリストの生命をわかちあつて、そして、これを何とかして、困っている人に、悲しんでいる人に、行き詰まっている人に与えようということのために、私たちがこの溶鉱炉の中に入れられては進んでいくではありませんか。

キリストのこのような驚くべきもの凄い限界突破の現実を読んで、深く祈ってくださいよ。もう、祈りは言葉にならない。何だか知らんけれども、キリストがこの驚くべき恵みの創造をしていらつしやるところのこの突破は、いわゆる自然科学的な認識とか力とか、あるいは哲学的な認識とか力とかは、みなこれを突破する。西洋の或る学者もそんなことを言っています。そうしなければダメだというようなことを。

そういうところに入ってきたらば、これは生命の霊の世界ですから、体験で感ぜられるんです。何かしらんが、私はあなた方もそうだと思うが、こうやって集会にきて、こうやって聖書に臨んでいるとグングン、力が入ってきませんか。その世界に入りつつ行くんだからね。それでうれしくてしょうがないんだ。

「イエス・キリストがそれくらい驚くべき人だったから、私はこの記事はうれしくてたまらない」

となつてきたら、本ものです。ところが、

「そんな不思議なことがあるかどうか」

なんて考えていたら、それはダメです。大体、みんなそんな角度でいる。さつき一番先に私が

「どうにもならん」

と言つたでしょ、どうにもならんから。「どうにもならん」だったら、では、どうしたらいいか。ただ主イエス・キリストの中に入るだけです。この現象ではなくて、主イエス・キ



リストの中に、

「こんな驚くべき現象をなさるところの、主さま、あなたの生命の中に」

と言って、その中に祈り込んでいくと、今度はこの現象が楽に受けとられてくる。

「全く、そうでしょう。イエス・キリストの生命というのは、そんなこともなさるでしょう。確かにそうでしょう」

と、そういうように受けとっていく人はグングン強くなる。霊的に恵まれていくし、生命が突破の生命、無量寿の世界に入っていきます。

だから、受けとらない人たちを見ると、かわいそうでたまらん。どうか、この世界に入ってくれないかと。魂がその世界に入ると、必ずその人らしく肉体的にも響いてきますから、存在的にも響いてきます。絶対にそうですから。

そういうようにして、入っていく。ところが、弟子たちは、この驚くべきキリストと一緒にいながら、分からないんだ。私たちもそうなんでしょうね。今、私たちはこのキリストにでつくわしたいなと思うけれども。

●二千光年のかなたから

そういうキリストの光景を今、もし見ようとしたら、どうしたら見えるかな。二千光年のかなたから大望遠鏡で見たら、イエス・キリストのこの光景が見えるよ。二千光年のかなたでは、二千年前の光が達するから、地上のキリストが見える。それは現実にはできないけれども、あり得ないことではない。けれども、私たちはそんな二千光年のかなたから大望遠鏡で見なくても、霊の目をもってこのキリストを、福音書でキリストの御霊の光をもって見れば、イエス・キリストが見えてくる。霊的なキリストの現実が見えてくる。そうしたらば、何かしらんけれども、私たちの中にひしひしと、素晴らしい根源現実が入ってくる。そして、もうくだらないものはみなすっ飛んで行ってしまう。

それだから、皆さん、私はキリストと共に、申し訳ないけれども、

「未だ知らぬか、悟らぬか、汝らの心なお鈍きか。目ありて見ぬか、耳ありて聴かぬか」

と言いたいよ。私はとにかく、そういうように開かせられつつあるから、皆さんに告白します。

「いや、もう悟りました。大丈夫です。先生、安心なさい」

と、そう言うてくだされば、私は本当にうれしい。

そして、最後にイエス・キリストが、

又なんじら思い出でぬか、¹⁹五つのパンを擘きて、五千人に与えし時、その余りを幾籃^{いくかじ}ひろいしか『弟子たち言う』²⁰『七つのパンを擘きて四千人に与えし時、その余りを幾籃^{いくかじ}ひろいしか』弟子たち言う『七つ』²¹イエス



言いたもう『未だ悟らぬか』

と。今のキリスト教界は、目が開いているようだけれども、聖書研究は行き届いているようだけれども、この使徒たちのように、キリストの光を本当に受けてない限りは、どんなにそれが立派そうにみえても、どんなにそれが精緻に極めていまして、それは空しい。ところが、皆さんが本当にこの中に入ったら、どんなにそれが破れのようにみえても、それはもの凄い世界なんです。それで行きましょう。そして、本当に私たちは、どんなことがあっても、絶対に気落ちすることなく、

「^せ為んかた尽くれども、絶対に^{のぞみ}希望を失わず。倒されるれども、絶対に滅びず」

と。あのコリント前書13章の如くに、

「担いぬぎ、愛しぬぎ、信じぬぎ」

ということになる。貫^ぬかなくては。貫く力はキリストのこのパン種の力です。

こういうところにぶつかりまして、皆さん、伝道ですよ。どういう現実でも。会社の人と遠足に行っても、何かの機会をつかまえて、相手の人の心の中にこの灯火^{ともしび}をとますことができる。即ち、私たちの現実は、

「道を伝えずんばあらず、生命をわかたずんばあらず、光を灯さずんばあらず」ということです。福音を伝えないではいられない。

「止むを得ざるなり」

とパウロが言った。そういう衝動が、そういった天的な衝動がもうその人の生命となったら、これは本当です。どうか、いよいよそうになっていたきたい。これはもう何と言つても、祈りですからね。どうか、祈りの世界で深くその中に入っていたいだきたいと思えます。今日はそこまで。

